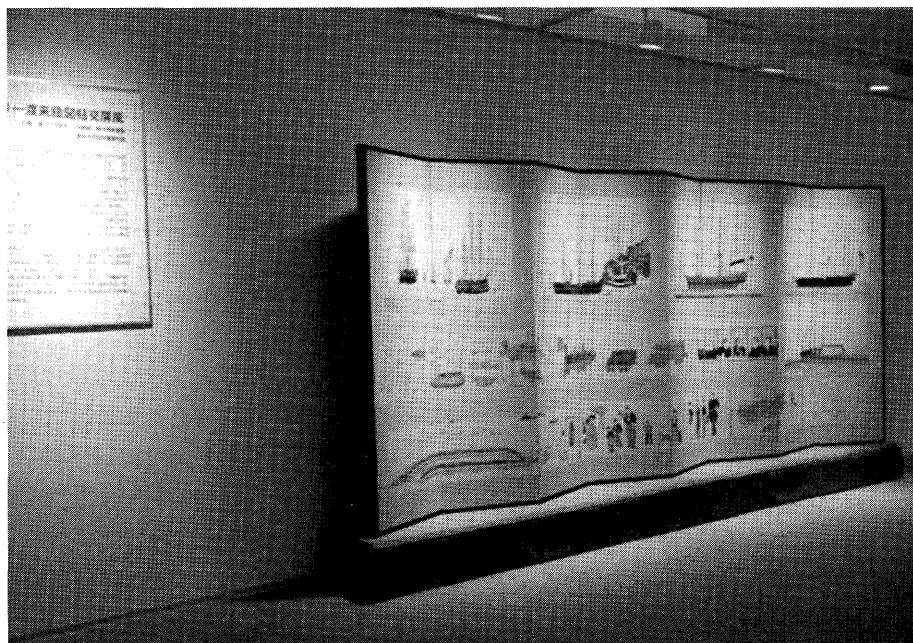


東京大学・MIT 合同展示「彼理（ぺるり）と Perry（ペリー）——交錯する黒船像」と記念シンポジウムの開催について

遠 藤 泰 生

1854年に江戸幕府とペリー提督との間で日米和親条約が調印されてから150年目にあたる2004年、日米関係の歴史を振り返る行事が内外で相次いだ。東京大学大学院附属アメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）でも、2004年10月3日から14日まで、米国マサチューセッツ工科大学（MIT）と合同でペリーの来航の歴史を振り返る展示「彼理とPerry——交錯する黒船像」を行い、10月3日には同題で記念シンポジウムを開催した。今回の特集に寄せられた3本の小論文はそのシンポジウムでの発表を踏まえたものである。

最初に合同展示について触れておきたい。マサチューセッツ工科大学のジョン・ダワー教授と宮川繁教授が中心となって作成した巡回歴史展示「Black Ships and Samurai」が全米各地で評判をとっていることは以前から仄聞していた。その企画と合同でCPASが歴史展示会を催すに至るまでには幾つかの紆余曲折があった。とくに、何を日本の観衆に語るのかという問題、すなわち展示のテーマをめぐっては、CPAS関係者の間でも意見が分かれた。そもそも、19世紀に刊行された図像史料——ペリーの『日本遠征記』に含まれた挿絵や黒船瓦版等を含む——を米国における歴史教育に役立てるために、「Black Ships



「ペリー渡来絵図貼交屏風」の会場風景



シンポジウムのパネル

and Samurai』は作成された。したがって、日本の各地に所蔵されている図像が大半を占めるそのヴァーチャル史料集の内容を日本でそのまま紹介しても、目の肥えた日本の観衆に新たなメッセージを伝えることは難しい。そこで、東京大学史料編纂所の協力を得ながら、東京大学が所蔵している内外のペリー関係資料を検索し直し、それらのうちから主要なものを拾い上げ合わせて展示することにした。ペリーの来航とその後の日米外交の展開を日米双方の視点から複眼的に映し出すというのがその狙いである。幸い、本郷の総合図書館が所蔵するロンドンで1794年に刊行されたアーロン・アロウスミスの世界地図や、史料編纂所が所蔵する一級の図像史料「ペリー渡来絵図貼交屏風」の原寸複写、松代真田藩に伝わるペリー肖像図模写など、MIT 単独では準備できなかった幅広い展示物を準備することができた。会場には、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部美術博物館を用いたが、同博物館の学芸員折茂克哉氏がこれらの展示物を実に見事にレイアウトし、展示の狙いを観衆に伝える手助けをしてくれた。氏の協力なくして、今回の展示は実現しなかったと思う。改めて感謝の気持ちを表したい。また、アメリカ研究振興会や東京大学大学院総合文化研究科からの資金援助にも感謝の意を表したい。展示期間が10月3日から14日までと比較的短く、加えてあいにくの台風が東京周辺を毎週末襲ったにもかかわらず、1300人を超える人々が学内外から来場した。その展示内容の詳しい紹介は、カタログ『CPAS Exhibition 2004: 彼理とPerry——交錯する黒船像』（CPAS）に譲るので、興味のある方は参照されたい。

ここでは、10月3日に開かれた記念シンポジウムの模様のみを最後に寸描しておく。

シンポジウムには3人のパネリストが招聘されていた。すなわち報告を行った順に紹介



展示の準備

すれば、三谷博（東京大学大学院総合文化研究科教授）、加藤祐三（横浜市立大学名誉教授）、富澤達三（神奈川大学 21 世紀 COE プロジェクトポストドクター）の 3 名で、各自がペリー来航の歴史的意義をその専門に即して語った。まず三谷氏が、一人の人間の生涯という限りあるタイムスパンでは捉えきれない歴史の大変換に幕末の日本の知識人は向かい合ったわけであり、その際に起きた国際認識の組み換えの知恵に現代の我々も学ぶところが多々あると強調された。経験にもとづく合理的な推論とイデオロギーに拠る原理を先行させる社会改変と、どちらを選択すべきか日本が今後決断を迫られる時もあると氏は考え、そのための教訓をペリー来航時の歴史に探ったのであった。続いて加藤氏が、19 世紀半ばに日本と他のアジア諸国が西欧列強の進出にどう対処し得たかという問題に論及し、日本のみが戦火を交えぬ「交渉条約」の調印に成功した点を高く評価した。隣国の清朝中国がアヘン戦争で「敗戦条約」の調印を余儀なくされたのとは全く異なるこの歴史体験が、以後の日本の近代化に与えた影響も今後研究の視野には入ってこよう。2003 年度にやはり我々 CPAS が行ったシンポジウムで、日本の開国と朝鮮の開国の比較史的検討がなされたが、国際政治システムが変動する一つの雛形を幕末の日本が提示したという点で、加藤氏の持論は明快である。最後に富澤氏が、広義には違法出版物と捉えることができる瓦版が、黒船艦隊渡来時の日本の知識人や庶民の情報収集に果たした役割とその限界を論じた。実際に数多くの図像を提示しながらの報告であり、歴史史料としてこれらをどのように活用しうるのでかという史料批判論も含めた実証的論考に膝を打つ聴衆が多かった。

いわゆる黒船史の愛好家も大勢つめかけた当日の会場では、ペリー派遣の背景を探る研究が日本では薄いことを批判する議論から、アメリカ研究者がオランダ語や中国語を駆使



展示内覧会の様子

できないために起きる研究の傾り、日米の“饗応合戦”に関する議論まで、様々の議論が交わされた。普段学術交流の機会が少ないアメリカ研究者と日本史の研究者が意見を交わす貴重な機会であったと言えよう。日米和親条約の調印にいたるまでにペリーが日本に示した態度については、日米関係史の専門家の間でも様々に評価が分かれる。例の「白旗」伝説にもいぜんとして様々の意見が寄せられている。しかし、総じて見れば、初めて生身の相手に接した幕末の日米外交の基調は、存外に穏やかなものであったと言えよう。美術博物館に展示された数々の図像を見詰めた後にシンポジウムの聴衆が得た総意もそこにあったと考えられる。図像を用いた日米相互認識の歴史は研究がまだそれほど進んでいない。その分野における今後の研究の発展を予知させる貴重な議論が展開されたシンポジウムもあった。

なお、「Black Ships and Samurai」は東京大学での展示ののち、下田、長崎、横須賀、函館などを巡回する予定である。そのことを付記しておく。